

ヲ立テ、此宮ヲ上將軍ト仰ギ奉テ、軍勢催促ノ令旨ヲ
被成下ケリ、(元弘三年)四月二日、宮、篠村ヲ御立有テ西山ノ
峰堂ヲ御陣ニ被召、相從フ軍勢二十万騎、谷堂・葉
室・衣笠・万石大路・松尾・桂里ニ居余テ、半ハ野宿
ニ充满タリ、殿法印良忠ハ、八幡ニ陣ヲ取、赤松入道
円心ハ山崎ニ屯ヲ張レリ、(中略) 去程ニ忠頼朝臣、
神祇官ノ前ニ扣ヘテ勢ヲ分テ、上ハ大舎人ヨリ下ハ七
条マデ、小路ゴトニ千余騎ヅ、指向テ責サセラル、武
士ハ要害ヲ拵テ射打ヲ面ニ立テ、馬武者ヲ後ニ置タレ
バ、敵ノ瘞ム所ヲ見テ懸出々々追立ケリ、官軍ハ二重
三重ニ荒手ヲ立タレバ、一陣引ケバ二陣入替り、二陣
打負レバ三陣入替テ、人馬ニ息ヲ繼セ、煙塵天ヲ掠テ
責戦フ、官軍モ武士モ諸共ニ、義ニ依テ命ヲ輕ジ、名
ヲ惜テ死ヲ争ヒシカバ、御方ヲ助テ進ムハ有レドモ、
敵ニ遇テ退クハ無リケリ、角テハ何可レ有勝負トモ
見ヘザリケル処ニ、但馬・丹波ノ勢共ノ中ヨリ、兼テ
京中ニ忍テ人ヲ入置タリケル間、此彼ニ火ヲ懸タリ、

時節辻風烈ク吹テ、猛煙後ニ立覆ヒケレバ、一陣ニ支
ヘタル武士共、大官面ヲ引退テ尚京中ニ扣ヘタリ、六
波羅是ヲ聞テ、弱カラソ方ヘ向ケントテ用意ニ残シ留
タル、佐々木判官時信・隅田・高橋・南部・下山・河
野・陶山・富権・小早河等、五千余騎ヲ差副テ、一
条・二条ノ口ヘ被向、此荒手ニ懸合テ、但馬ノ守護
大田三郎左衛門被打ニケリ、(中略) 夕陽ニ及テ軍散
ジケレバ、千種殿ハ本陣峰ノ堂ニ帰テ、御方ノ手負打
死ヲ被註ニ、七千余人ニ余レリ、其内ニ、宗ト憑タ
ル大田・金持ノ一族以下、数百人被打畢、

*「第四ノ宮」の誤りか。第四の宮は聖護院靜尊法親王。

〈参考〉 太平記 卷一

第四ノ宮モ、(民部卿三位源親子)同御腹ニテゾハシケル、是ハ聖護院(寛助法親王)二品親王

ノ御附弟ニテヲハセシカバ、法水ヲ三井ノ流ニ汲、(キバツ)范前(仏

となる認可)

○守護太田守延の戦死で、但馬の武士はその中心を失った。

三 梅松論 下

去程に翌五月廿六日兵庫を立て西宮に御陳(建武三年)をめされ

(補本)

き、湊川にて正成(正成)を討て、大勢にて都へ責のぼるよし

聞えければ、廿七日、去正月の夕のごとく又山門へ臨

幸なる、洛中へは先丹波より仁木兵部大輔頼章・今川

駿河守頼貞・丹後・但馬両国の軍勢を相隨て、各錦の

御旗を先立て数千騎洛中へ打入、(中略) 伯耆守長年、

三条猪熊にをいて豊前国の人草野左近将監が為に討

取れぬ、義貞は細川卿公定禪目をかけて度々合近づき、

すでに義貞あぶなく見えしかども、一人当千の勇士共

折ふさがりて命にかはり討死せし間、二三百戦に打な

されて、長坂にかゝりて引とぞ聞えし、南は畿内の敵、

作道より寄来りしを、越後守泰即時に追散し大勢討

取、宇治よりは法性寺辺まで責入たりしを、細川源藏
人頼春、内野の手なりしを召ぬかれて、大将として菅
谷辺まで合戦せしめ打散しける、竹田は今川駿河守頼

貞大將として、丹後・但馬の勢馳むかひて追落す、六
月晦日、数ヶ度の合戦悉く未の刻以前に打勝けるこそ
仏神の御加護と目出度かりける、

四 太平記 卷第三十六

○山名伊豆守落美作城事付菊池軍事

斯ル處ニ、七月十二日山名伊豆守時氏・嫡子右衛門

佐師義・次男中務大輔、出雲・伯耆・因幡三箇國ノ勢

三千余騎ヲ卒シテ美作へ発向ス、当國ノ守護赤松筑前

入道世貞、播州ニ在テ未戦前ニ、広戸掃部助ガ、名

木袖二箇處城、飯田ノ一族ガ籠タル築向ノ城、菅家ノ

一族ノ大見丈ノ城、有元民部大夫入道ガ菩提寺ノ城、

小原孫次郎入道ガ小原ノ城、大野ノ一族ガ籠リタル大

野城、六箇所ノ城ハ、一矢ヲモ不レ射降参ス、林野・

妙見二ノ城ハ、廿日余リ悚タリケルガ、山名ニ免角ス

カサレテ、遂ニハ是モ敵ニナル、今ハ倉懸ノ城一残テ、

佐用美濃守貞久・有元和泉守佐久、僅ニ三百余騎ニテ

楯籠リタリケルヲ、山名伊豆守時氏・子息中務少輔三千余騎ニテ押寄セ、城ノ四方ノ山々峰々二十三箇所ニ陣ヲ取テ、鹿垣ヲ二重三重ニ結ヒ廻シ、逆木シゲク引懸テ、矢懸リ近クゾ攻タリケル、播磨ト美作トノ堺ニハ、竹山・千草・吉野・石堂ガ峰、四箇所ノ城ヲ構テ、赤松律師則祐、百騎ヅ、ノ勢ヲ籠タリケル、山名ガ執事小林民部丞重長、二千余騎ニテ星祭ノ嶽ヘ打上リ、城ヲ目ノ下ニ直下シテ、透間モアラバ打蒐ラント、馬ノ腹帶ヲ堅メテ引ヘタリ、赤松筑前入道世貞・舎弟律師則祐・其弟彈正少弼氏範・大夫判官光範・宮内少輔師範・掃部助直頼・筑前五郎顯範・佐用・上月・真嶋・杉原ノ一族相集テ二千余騎、高倉山ノ麓ニ陣ヲ取テ、敵倉懸ノ城ヲ攻バ弊ニ乘テ後攻ヲセント企ツト聞ヘケレバ、山名右衛門佐師義、勝レタル兵八百余騎ヲ卒シテ、敵ノ近付ン所ヘ懸合セント、浮勢ニ成テ引ヘタリ、赤松ハ右衛門佐小勢也ト聞テ、先此敵ヲ打散サント打立ケル処ニ、安保肥前入道信禪、俄ニ敵ニ成テ

但馬国ヘ馳越、長九郎左衛門ト引合テ播磨ヘ打テ入ント企ケル間、赤松、「サラバ東方ニ城郭ヲ構ヘ、路々ニ警固ノ兵ヲ置ケ、」トテ、法花山ニ城ヲ構ヘ、大山越ノ道ヲ切塞デ、五箇所ヘ勢ヲ差向ケル、依レ之進スルモ不レ叶、進退歩ヲ失テ前後ノ敵ニ迷惑ス、(中略)

去程ニ倉懸ノ城ニハ人多シテ兵糧少カリケレバ、戦フ度ニ軍利有トイヘ共、後攻ノ憑モナク、食尽矢種尽ケレバ、無レ力十一月四日遂ニ城ヲ落ニケリ、是ヨリ山名山陰道四箇ヲ并セテ勢弥近国ニ振ノミニ非ズ、諸國ノ聞ヘヨビタ、シカリケレバ、世中如何アラント危ク思ハヌ人モ無リケリ、

四三 太平記 卷第三十九

○山名京兆被參御方一事

山名左京大夫時氏・子息右衛門佐師氏ハ、近年御敵ニ成テ、南方ト引合テ、兩度マデ都ヲ傾シカバ、將軍

ノ御為ニハ上ナキ御敵ナリシカ共、内々属縁、「兩度ノ不義全ク將軍ノ御世ヲ危メ奉ラントニハ非ズ、只道譽ガ余ニ本意無リシ振舞ヲ思知ゼン為許ニテ候キ、其罪科ヲ御宥免有テ、此間領知ノ國々ヲダニモ被恩補候ハマ、御方ニ参テ忠ヲ致スベキ」由ヲゾ申タリケル、ゲニモ此人御方ニ成ナラバ、國々ノ宮方力ヲ落スノミナラズ、西國モ又可ニ無為一トテ、近年押ヘテ被領知ツル因幡・伯耆ノ外、丹波・丹後・美作、五箇國ノ守護職ヲ被充行ケレバ、元来多年旧功ノ人々、皆手ヲ空シテ、時氏父子ノ栄花、時ナラヌ春ヲ得タリ、是ヲ猜テ述懐スル者共、多ク所領ヲ持ント思ハマ、只御敵ニコソ成ベカリケレト、口ヲ曠ケレ共甲斐ナシ、「人物競紛花、麗駒逐鉏車、此時松与柏、不レ及道傍花」ト、詩人ノ賦セシ風諭ノ詞、ゲニモト思知レタリ、

四三 光嚴上皇院宣 建武三年十一月廿七日

南禪寺文書上巻四〇号

遠江国初倉庄・播磨国矢野別名・同国大塩庄・但馬国池寺庄・加賀国得橋郷・得南・益延・長恒・府南社^(神)□・同国笠間東保・備中国三成郷・当寺門前敷地

以下寺領等、

右所々、任代々勅附、知行不可有相違、者

院宣如此、仍執達如件、

建武三年十一月廿七日

參議（花押）

南禪寺長老清拙上人禪^(正證)^(室)

ヲ^(ソネ)空シテ、時氏父子ノ栄花、時ナラヌ春ヲ得タリ、是

ヲ猜テ述懐スル者共、多ク所領ヲ持ント思ハマ、只御

敵ニコソ成ベカリケレト、口ヲ曠^(ヒツメ)ケレ共甲斐ナシ、

「人物競紛花、麗駒逐鉏車、此時松与柏、不レ及道傍

花」ト、詩人ノ賦セシ風諭ノ詞、ゲニモト思知レタ

月廿五日の「龜山上皇院宣」によつて加賀國小坂庄の替わりとして、播磨國矢野別名・同大塩庄とともに南禪寺に寄進されていた。池寺庄は朝來郡にあり、賀都庄とも号した（四二三号文書）

三七 但馬國宣 建武五年八月十五日

南禪寺文書上巻四六号

(花押)

但馬國鍛治屋垣可令奉行給之由、被仰下候也、仍執達
如件、

建武五年八月十五日

前因幡守(草名)

伊達^(貞綱)入道殿

三八 比丘尼法覺寄進狀案 貞和五年三月十一日

播磨清水寺文書七三号

右所々、當知行不可有相違、者
天氣如斯、仍執達如件、

正平七年二月十七日

右衛門權佐^(葉室光資)(花押)奉

南禪寺長老蒙山上人方丈

奉寄附 播磨國清水寺

但馬國氣比水上庄領家職事
(城崎郡)

右件所領者、比丘尼法覺重代相伝地也、然而依有彼
志、手継文書共奉寄進処也、仍寄進之如件、

貞和五年三月十一日 比丘尼法覺 在御判

禁制 南禪寺領池寺庄

右於當所、軍勢甲乙人等、不可致濫妨狼藉、若被違犯

三九 後村上天皇綸旨(宿紙) 正平七年二月十七日

南禪寺文書上巻六〇号

遠江國初倉庄・播磨國矢野別名・同國大塩庄・但馬
国池寺庄・加賀国得橋郷得南・益延・長恒・府南社神主
職・同國笠間東保・備中國三成郷・当寺門前敷地以

下

四〇 下野權守某禁制 文和二年正月二十八日

南禪寺文書上巻六三号

者、可被處重科之状、如件、

文和二年正月廿八日

下野権守（花押）

四一 伊達道西貞綱讓狀 貞治元年十一月十五日

南禪寺文書上巻六六号

進(候カ)六月仁五貫文可沙汰進候、所殘肆拾□任請文之旨、十月中可皆進候、仍請(文カ)□状如件、

永和二年丙卯月廿五日 □部

長加賀五郎左衛門(門尉カ)

讓渡所領事

但馬國小佐郷式(義父郡)分一方地

頭職事

右當鄉式分一方者、(道西)重代相伝知行之地頭職也、然

者子息直綱仁所讓与也、更於向後、不可有他妨者也、

有(限御)□公事等無懈怠、永代無相違可知行也、仍讓狀如件、

貞治元年十一月十五日
道西（花押）

（伊達貞綱）

四三 長加賀五郎左衛門尉請文案 永和二年四月廿五日

広島大学蔵 猪熊文書（）青蓮院文書六号

〔瑞裏書〕
〔請文案文〕

（城崎郡）
大浜庄御年貢五十五貫文、來月十日以前拾貫文可沙汰

四三 南禪寺塔頭慈聖院領諸莊園重書目録

早稻田大学蔵旧磯谷家文書 康暦二年五月三日

南禪寺文書上巻八四号

竜湫叟周沢（花押）

慈聖院領諸莊園重書正文已下目録

（中略）

一 但馬國土田郷内墓垣村地頭職事布施彈正入道昌椿(資連)

永和四・三・二、寄進之、

一通寄進状 永和三・四・

二通御教書于時管領武藏守頼之、

応安七・八・十二、永和元・七・七、

一通守護山名右衛門佐施行
（忠安七・八・十八、

三通同守護代布志名注進状并渡状、昌椿代請取

永和元年
八月十五日
八十六、七

一二卷地下目録永和一、
同三

(中略)

〔奥書〕(庚暦)二年五月三日 周沢為後鏡加判、以置之於慈
聖院文庫、遺弟護持之可也。」

四四 足利義滿寺領寄進状案
至徳三年十二月廿五日
南禪寺文書上巻一二五ノ80号

但馬国義父郡小佐郷除恒富地頭職事、所寄附南禪寺也、永代

領掌不可有相違之状、如件、

至徳三年十二月廿五日

足利義滿
左大臣 御判

当寺長老

○案文としてのみ伝わり、正文は現存しない。伊達氏が
小佐郷地頭職を得たのは鎌倉初期で、承久三年八月廿
五日には本地頭為安の譲りに任せて尼常陸局が小佐郷
地頭を安堵されている。その後、二分方と一分方に分

康永四年六月
十八日、庚午、天晴、(中略) 今日掃部頭師香参入、
家君朝来郡有御対面、是出石社年貢結解事、去年於文殿有
沙汰、彼時儀不審云々、引見可申旨有御返事、

四五 師守記 康永三年八月十六日~応安四年二月廿八日
康永三年八月
十六日、癸酉、陰霽不定、午剋小雨灌、終日小風、
今日或仁請申穀倉院領但馬国朝来郡比治庄了、

庄などを所領としてもつており、それらの関連史料が
南禪寺文書に散見する。

かれ、二分方はさらに二分されて鎌倉末期に及んだ。

南禪寺に寄進されたのは、恒富名（三二町余）を除く
小佐郷の全定田（五六町九反余）の地頭職であつたら
しく、このとき但馬伊達氏関係の文書が南禪寺に寄進
されたようである。南禪寺所蔵の伊達氏関係文書は現
在一五通あるが、もつとも大切な本文書の正文が失わ
れてしまつたことは惜しまれる。なお、南禪寺は、但
馬ではほかに土田郷内墓垣村地頭職、と氣多郡太多庄・池寺
朝来郡なども所領としてもつており、それらの関連史料が
南禪寺文書に散見する。

(貞和五年三月)

十一日壬寅、天晴、(中略) 今日穀倉院領但馬比治・

(朝來郡)

(義父郡) 高田両庄被申付音博士了、予申沙汰、深原一両年依

地下違乱、無足之由、被歎申之故也、

(貞和五年三月) 穀倉院領但馬国比治・高田両庄所被申付也、可令

知行給之由、可申旨候也、恐々謹言、

貞和五年三月十一日 師守

音博士殿

為向後傍例、被經御沙汰、可被仰下云々、(中略)

記録所

貞治三年二月廿六日庭中条々
仰、此事重々有御沙汰、被弃捐在家訴畢、

賀茂社氏人等申一條以北水田事
賀茂社氏人等申一條以北水田事

仰、故者訴陳事、為向後傍例、被經御沙汰可被仰下、
同社氏人等申但馬国矢根庄事

一 祐可催促奉行職事矣、
一 幸千代丸申因幡国大江・賀露両社神主職(并)
都鄙漆物等事

(出石郡)

師卿之由載之、渡開闢□處、

着座

大宰權帥之由、可載之旨、問答、

大宰權帥

返明宗之間、書直渡之、

藤中納言

(略)

(貞治一年閏正月)

十三日甲申、天陰、午剋以後降雨、酉剋晴、(中略)

端書、

(山城國) 穀倉院領但馬国比治・高田両庄文書各在加一見返納候、(中

(略)

(貞治一年閏正月)

「今日召次有未來之間、

穀倉院領但馬国比治・高田両庄等文書各在加一見返納候、(中略)

見、返□開闢了、」

(略)

(貞治二年二月)

廿六日辛酉、天晴、(中略) 未剋天皇出御簾中、先之

端座

大宰權帥仲房卿前權中納言、・藤中納言時光卿直衣、

下結、參着、庭中三ヶ条(中略) 矢根庄事故者訴陳事、

(後光敏)

又天

(貞治五年十一月)

十六日甲午、天陰、入夜屬晴、(中略)

(貞治三年八月)

廿五日丙辰、天晴、(中略) 今夜戌剋許、山名伊豆

(時氏)

前司自美作國上洛、武家一族也、件人多年御敵也、

而自去年降雨、仍去春子息兩人上洛、于今在京、又天

下靜謐也、

(貞治五年十一月)

十六日甲午、天陰、入夜屬晴、(中略)

〔裏書〕
一銘仲光

為邦朝臣事口宣書改進上候、

〔出石郡〕
矢根庄事、目六案披見候之處、可有〔錄〕勅問由、被仰

下候けり、廢忘仕候了、返々尾籠候、他事期參上候、
仲光謹言、

十一月十四日

仲光狀

」

〔応安四年二月〕
廿八日、山名左京大夫入道道靜入滅云々、累日所勞也、
今夜則送丹波國云々、

四六 統愚昧記

応安四年二月二十八日

〔応安四年二月末尾追記〕

今月下旬事也、

先日、何日哉可尋之、山名左京大夫入道逝去了、子息
〔三十八日〕
右衛門佐入道上洛、逢終焉云々、閉眼之後、下向丹
州、子息・所從等不貽一人下向、葬送水所辺云々、
彼入道生年七十三歳云々、無道之勇士、以命終、結

四七 難太平記

句又非短命、大幸之者也、

昔、山名修理大夫時氏といふしは、明徳に内野のい
くさにうたれし陸奥守が父なり、それが常に申しは、
我子孫はうたがひなく朝敵に成ぬべし、其謂は我建武

〔清氏〕

以来は当御代の御かけにて人となりぬれば、元弘以往
はたゞ民百姓のごとくにて、上野の山名といふ所より
出侍しかば、渡世のかなしさも身の程も知にき、又は
軍の難儀をも思ひしりにき、されば此御代の御影の忝
事をもしり、世のたゞすまひも且は弁たるだに、今は
やゝもすれば上をもおろそかにおもひたり、人をもい
やしく思ふにて知ぬ、子どもが世と成ては君の御恩を
も親の恩をもしらず、をのれをのみかゞやかして過分
にのみ成行べき程に、雅意にまかせたる故に御不審を
かふむるべきなりと子息どもの聞處にて申き、如レ案
御敵に成しかば、昔人はかやうの大すがたをばよく心

得けるにや、実此人一文字不通なりしかども、よく申
けるにこそ、

四八 明徳記 上

去建武年中ニ大御所尊氏將軍御代ヲ被レ召テ既六十

年ニ及テ、一天下悉武徳ニ帰シ、万民皆其化ニ誇ル、
兵乱久絶テ四海ノ激浪治リ、國民無事ニシテ九嶋狼煙

立去ル処ニ、明徳二年未歳、山名陸奥守氏清・同播磨

守満幸以下一類悉同心シテ隱謀ノ企アルニ仍テ、不慮

ニ兵乱出来テ、都鄙暫ク不穏、其濫觴ヲ尋ニ、一族

山名宮内少輔時熙、同右馬頭故トゾ聞エシ、譬ヘバ武

恩莫大ナルニ驕テ、此一家ノ人々、毎事上意ヲ奉ニ忽
緒ニ体ナリシ中ニ、山名伊予守時義但馬國ニ在国シテ

京都ノ御成敗ニモ不レ応、雅意ニ任テ振舞ケル間、誠

御沙汰有バヤト思召立セ給ヒケル刻、病ニヲカサレテ
伊予守早世シヌル上ハ、無レ力被^(時義)思食ニケルニ、其遺

跡ノ輩伊予守・宮内少輔^(裕光)、右馬頭^(氏幸)以下猶過分ナル而耳

ナラズ、父祖ノ悪逆ハ子孫ニ可レ酬理ニ任、彼等ヲ御
退治可レ有ニテ、其國々へ討手ヲゾ下サレケル、山名
ノ播磨守^(満幸)ハ伯耆國ヲ追罰シテ、転テ當國ト隱岐國トヲ
拝領シ、陸奥守^(氏清)ハ但馬ノ國ヲ責隨テ其國ノ守護職ニ任

ズ、(後略)

○明徳記は、山名氏清・満幸の反乱の顛末を記した軍記物。
ここでは、その冒頭部分のみを掲げた。

四九 山名系図 『続群書類從』

義範

新田義重二子、或作長子、今從家譜、号新田太郎三郎、又称山名冠者、或曰山名三郎、事源賴朝、賴朝以其宗族恩遇頗渥、叙從五位下、為伊豆守、嘗從源義經討平氏、而有功、於是文治元年八月十六日賴朝賞義範等六人勲績、補伊豆守
護職、

〔中略〕—政氏^(義氏)山名孫弥イ二郎、
一作弥太郎、

時氏

山名小二郎、事足利尊氏、叙從五位下、任伊豆守、為

彈正少弼、左京大夫、興國二年追擊塙治高貞、遂殺高

貞于佐々布山、尊氏大賞之、授以侍所職、食因幡・伯耆

二州、正平七年時氏懸償道譽驕肆、挾族皈吉野、帥數

州兵、勤王師、兵勢大振、十九年時氏師義悔之、懇請

義詮曰、幸忝臣旧恩、而賜所掠領諸州、則當再竭愚忠

也、義詮喜許之、以時氏補因幡・伯耆・丹波・丹後・

美作五州守護職、剃髮改名道靜、建德二年十二月廿八

日卒、葬于伯州光孝寺、法名光孝寺鎮国道靜、

山名弥孫二郎參河守、
正平三年十月或作十一月廿六日從時氏擊楠正行、

戰死于瓜生野一作四
条繩手、

師義本名師氏、山名小太郎、
為左京亮右馬頭、

義幸讚岐守

伊豆守、右衛門權佐、任
小侍所職、後剃髮法名大
盛道興、天授二年三月十
一日卒、稱正受院、

大膳大夫
熙之
教之
相模守

事足利義滿、屢有戰功、
因封紀伊國、元中八年
党氏清叛、義理未発兵、

政清兵部少輔
応仁御敵、文明九

豊之宮内少輔

満幸

事將軍義滿、大被恩眷、
為播磨守、彈正少弼、及

兄義幸病、為一家宗、領

丹後・出雲二州、元中七

年与氏清共擊時熙・氏幸、

有功、因加賜伯耆・隱岐

二州并領四州守護職、其

後滿幸掠後円融御厨邑、

義滿聞之、苦諭奉還之、

於是官吏住横田庄也御厨
滿幸又使人逐之、義滿大

怒、乃欲罷其守護職、先

使滿幸屏居丹後、滿幸深

抱憤恚、潛出丹後到泉州、

說氏清定叛計、戰敗逃亡、

祝髮為僧、逃逃筑紫、應

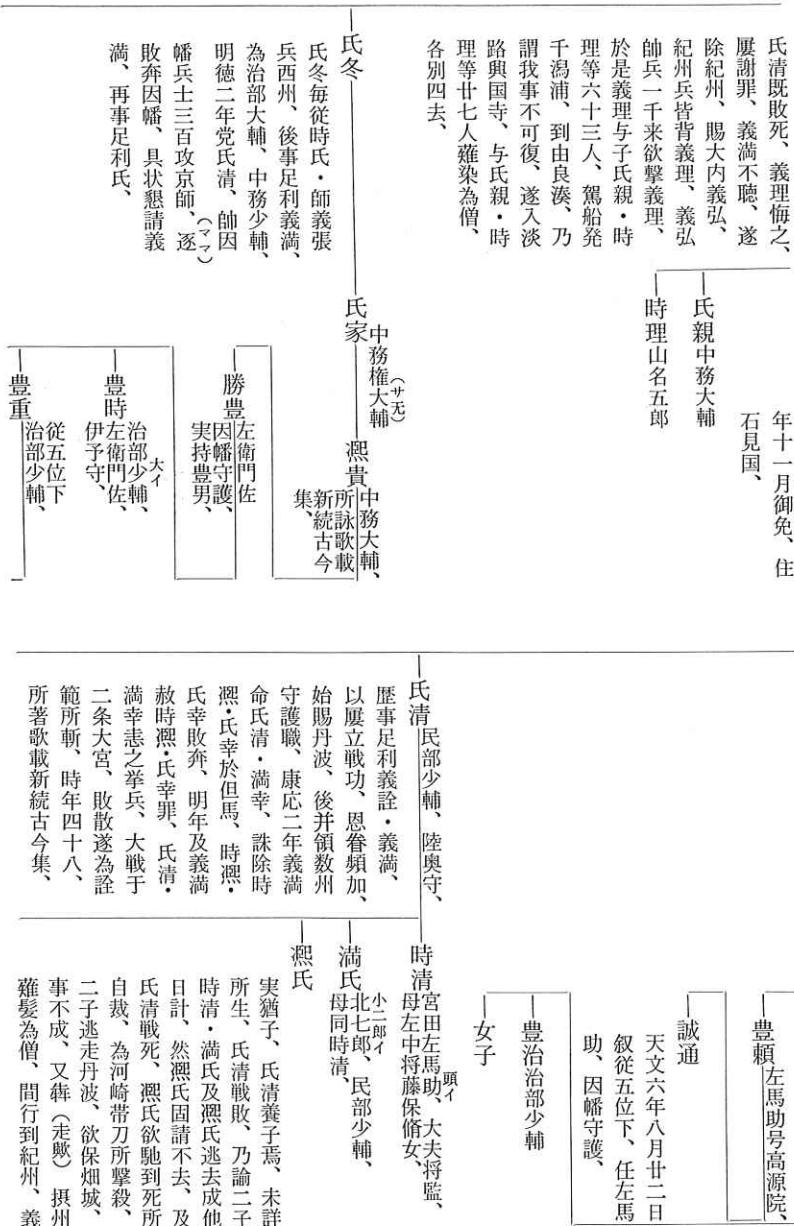
永元年伏誅、

義理山名修理、權大夫、
彈正少弼、

修理大夫
教清法名淨勝、

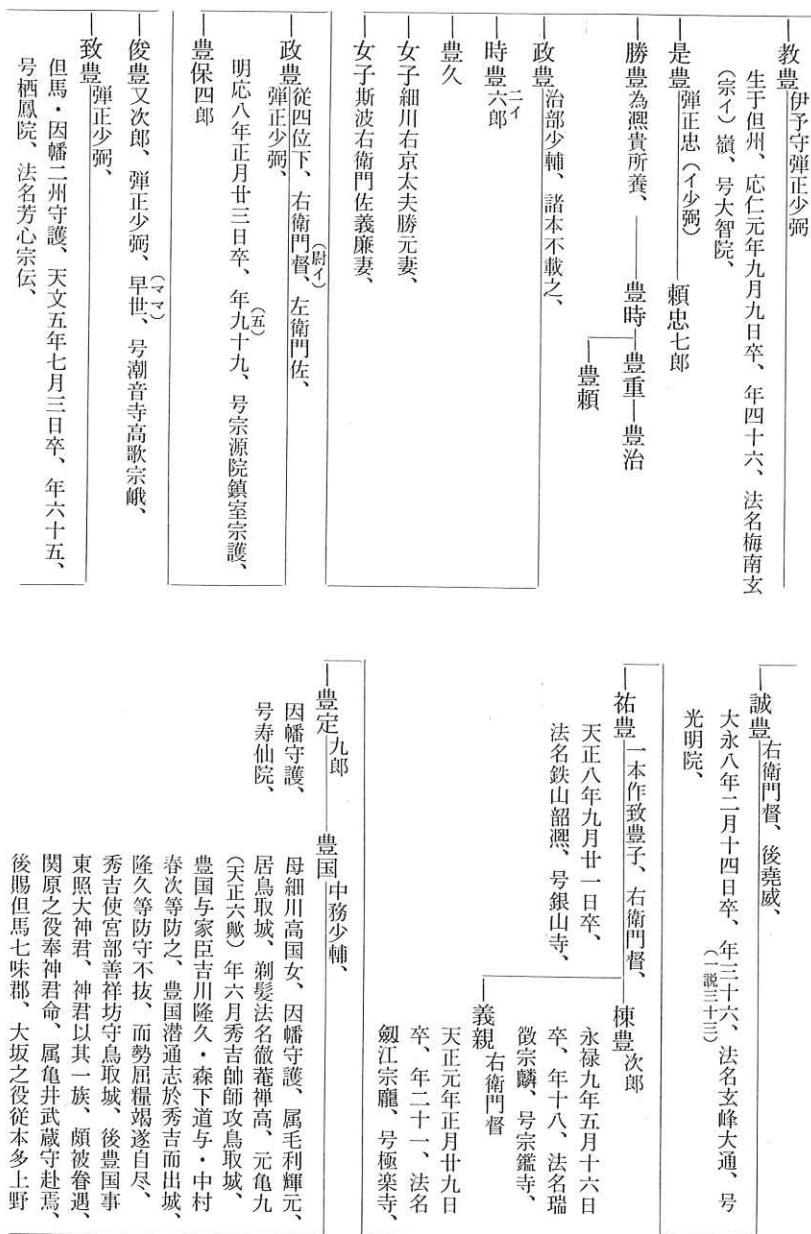
事足利義滿、屢有戰功、
因封紀伊國、元中八年
党氏清叛、義理未発兵、

政清兵部少輔
応仁御敵、文明九



時 稔	理惡不死父難、不面之、既而流聞母堂在根来、就侍婢請一面之、婢以告、母閉眼掉頭曰、無勇非士、不孝非子、盍恥義子懇氏、实結恨於黃壚、而遂被衣不復言、二子內負外惡而亡跡、女子滿幸妻
時 稔	一本作氏冬、為師義所養繼家、為伊予守、左京權大夫、彈正少弼、左衛門尉、康応(或作永)年五月九日卒、年四十一、法名大等宗宗(一作道均)、号円通寺、在但州鷹野、
義 数	上總介、尾張守、宮内少輔、
戰死于二条大宮、	
義 繼	信濃守、早世
氏 重	右馬助、早世
高 義	為氏清所養、為修理亮、元中八年十二月晦党氏清、戰死于京師、
義 治	山名九郎、駿河守、上總介、
氏 賴	山名十郎

時 稔	一作照、為宮内少輔、右衛門佐、一作時義死、時灘與氏幸在國、襲領食邑、義滿惡時義暴虐、命氏清等往擊之、兄弟敗走、明德二年兄弟微服到京、懑款謝罪、義滿聽之、遂赦其罪、由是氏清等叛攻京師、時灘奮戰有功、義滿賞之、賜時灘以但馬、氏幸以伯耆、自是時灘繼山名宗、与一色、京極、赤松三氏代補侍所職、世稱曰四職、後難髮称巨川居士、永享七年七月四日卒、年六十九、法名巨川常灘、称光明菴、号大明寺、時灘好作詩及僂歌、其詩歌傳于世、
持 稔	刑部少輔、永享九年七月備後で殺さる、
持 豊	左衛門佐、右衛門督、
但 馬	因幡・伯耆・備前・備後・播磨・美作・石見八州守護、後剃髪、更名宗全、文明五年三月十九日卒、年七十、法名最高崇(道一)峰、号遠碧院、宗全面色甚赤、世人呼曰赤入道、
熙 高	実高義子(按嘉吉記作修理大夫)



介赴焉、寛永三年十月七日卒、年七十
九、号東林院、

一 豊政 平右衛門

事台徳公、関原及大坂之役從焉、寛永七年六月廿八日卒、
年六十、

一 豊義太郎左衛門

(後略)

○「山名系図」は、多種多様あって、精粗もまちまちである。ここでは『続群書類從 第五輯上』所収本をもとに、一部補訂して掲げた。

4 山名氏とその家臣たち

ここでは山名時熙・持豊・政豊三代を中心とする史料を掲げる。時熙の時代は、父時義の死（康応元年五月四日）から四六年間、持豊の時代は時熙の死（永享七年七月四日）から三八年間、政豊の時代は持豊の死（文明五年三月十八日）から二六年間、三代で一二〇年間に及ぶ。明徳の乱で、

但馬・因幡・伯耆三か国の守護に転落した山名氏は、時熙

の時代に隠忍自重して勢力を蓄積し、持豊の全盛期を迎える。持豊は応仁・文明の乱の西軍の総帥となつたが、最初の目論見に反して將軍は東軍に擁されて叛乱軍の形に陥り、その後、政豊が將軍家に降参する形で戦線から脱落する。

この間、嘉吉の乱の恩賞として得た赤松氏の旧領三ヶ国を奪われ、政豊はその回復を狙つて播磨に進撃して、一時は

旧領をほぼ回復したが、結局は七年の日数を浪費し多くの家臣を失つて敗退せざるを得なくなり、山名氏の権勢は崩壊する。紙幅の都合上、ここでは、まず最も基本的な史料を厳選して掲げ、あわせて今までの但馬史であまり利用されなかつた史料を中心に掲出した。時熙の時代については、小坂博之著『山名常熙と禪刹』が詳しい。嘉吉の乱を赤松氏の側から描いたのは、高坂好著『赤松円心・満祐』で、両書とも大いに参考になる。『応永記』や『嘉吉記』・『嘉吉物語』などの軍記物は、すべてこれを割愛している。

四〇 満済准后日記 応永三十五年四月廿三日(永享三年五月廿四日)

『続群書類從』補遺一

廿三日、晴雨、(中略) 山名右衛門佐入道三日病以外大
(応永三十五年四月)

事、大略待時式云々、仍遺跡事刑部少輔兄、(持照) 弾正弟、(持豐)

兩人中為父入道計、悉申付彈正了、而為公方様、刑

部少輔已兄事也、多年又昵近奉公了、旁不便被思食

間、以刑部少輔、可為相統仁体旨、具可仰付山名旨、

可相談管領由、(畠山滿家) 被仰間、其由仰遣管領了、管領御返

事、畏被仰下、何様可申遣云々、(後略)

(永享三年五月)

六日、晴、(中略) 山名刑部少輔事、(持照) 被仰旨在之、(後略)

廿四日、晴、(中略) 次山名刑部少輔事、今度振舞此間

儀共以外様也、雖然山名宿老事也、為公方無左右御

突鼻条、山名心中被憚思食也、所詮刑部少輔事、如

元出仕申サせ候ハムトモ、又遠国へ下置候ハムトモ、

簡要可被任山名所存、此由可仰遣云々、則召寄山口

申遣了、(後略)

籍乱歟云々、(後略)

(永享九年七月)

卅日、晴、(中略) 抑山名刑部少輔(持照) 被討云々、首上洛早

速落居珍重々々、

(嘉吉元年六月) 八月一日、晴、仲秋吉兆幸甚々々、(中略) 抑山名刑部

少輔首事、御悦喜目出云々、

廿四日、雨降、赤松公方入申、有猿樂云々、及晚屋形

喧嘩出来云々、騷動是非未聞之處、三条手負て帰、(東應)

公方御事ハ実説不分明、赤松家炎上、武士東西馳行、

猥雜無言計、至夜伊与守屋形炎上、家人共家自燒、(赤松義雅)

公方討申、取御首落下云々、仰天周章中々無是非、

内裏人々馳參、以重賢驚申、三条へも遣、只猥雜半

死半生之式云々、是ニも人々參集、終夜不寢悶然而

曰、西室大夫落行云々、

廿五日、晴、昨日之儀粗聞、一献兩三献猿樂初時分、

内方とくめく、何事そと有御尋、雷鳴歟など三条被

申之處、御後障子引あけて、武士數輩出て則公方討

申、三条御前之太刀を取て、(御引出物) 進太刀也、切払顛倒被

『続群書類從』補遺二

翌一 看聞御記 永享七年七月四日～嘉吉元年六月廿七日

(永享七年七月) 四日、晴、(中略) 山名今曉逝去云々、遺跡兄弟相論可

(常懇)

切伏、山名(熙貴)大輔、京極加賀入道、土岐遠山走手、三人討死、細川下野守(持春)、大内等腰刀計(持世)にて雖振舞、不及敵取、手負て引退(細川持之)、管領、細河讚州(持常)、一色五郎、赤松伊豆(貞村)等ハ逃走、其外人々右往左往逃散、於御前無腹切人、赤松落行、追懸無討人、未練無謂量、諸大名同心歟、不得其意事也、所詮赤松可被討御企露顕之間、遮而討申云々、自業自得果無力事歟、將軍如此犬死、古來不聞其例事也、御死骸ハ燒跡より瑞(季瑞)瓊真葉(貞葉)藏主求出て、等持院へ奉渡、御首ハ攝津中島ニ御座之由、赤松注進、其使管領切首云々、雜説種々繁多也、委細不能記録、(後略)

廿七日、晴、住心院參、世事閑談、赤松討手細川讚州(持常)、山名々々、赤松伊豆、廷尉等諸大名可發向云々、(後略)

(嘉吉元年六月)廿四日、己丑、雨下風寒、土用入也、(中略)

『大日本古記録』

今夕有前代未聞珍事、赤松彦次郎教康○故赤松則祐、律師曾孫○故大膳大夫入道義、上總介左京大夫則孫、當時大膳大夫、依諸敵御退治嘉礼成中渡御、近日入道滿祐法名子也、○赤松人々有此經營之故也、未斜、室町殿征夷大将軍從一位前院(義善)庵院殿御息、勝定院殿御弟、天台座主義渡御彼宿所、西門、去庵永舟五年御還俗、御俗名義教、○持常管領細川右京大夫持之朝臣、畠山左馬院以西、冷泉以南、二条以北、諸大名助・山名彈正、細川讚岐守・大内近日参・京極加賀入道(高数)、○持常在京之・○持常御相伴也在其席、猿楽三番・盃酌五献道已下諸大名、○持常御相伴也在其席、猿楽三番・盃酌五献之時分、開御座後障子、着甲冑武者數十人乱入之、奉弑之、其時管領已下着座之諸大名、即起座退出、不及報答、纔大内介・京極加賀入道留敵○拔刀留敵、又御前金覆輪太刀○礼太刀在之、拔件太刀留敵、○左衛門督美雅卿、○中納為御相伴參候之、元來不帶兵具上者無力之處、言、○相防御前金覆輪太刀事也、○扶當座止命、下野守○被疵、帰家死去、室町殿御頸為敵被取了、野中山井下野守○被疵、○扶被子退出了、走衆遠務大輔頬同前、各指劍鉢、○彦次郎教康、○左馬助叔父也、○則祐二条西行大宮南行、落行

西国之處、逐懸人無之云々、言語道断次弟也、(後略)

(同年七月) 六日、庚子、天晴、(中略) 赤松誅罰事、發向遲引慮外

事也、今月中少々可進發云々、備前・美作両国守護職事、依誅罰忠功之仁可被充行之由評定在之、播磨国守護事、猶可被定人体歟之由有沙汰、其猶可隨軍功之由評定云々、共以可然事也、

十一日、乙巳、雨下、夕立雷鳴、

赤松有馬義忠・山名伯耆者護等、
教之

今日細川讚岐守持常○進發播州、為赤松退治也、

十二日、丙午、天晴、

今日侍所持豐山名也、可覗所朝倉志波内斯之由称之、赤松被

管人所縁之故云々、元所縁勿論、今已各別之由答之、

因茲及難儀之處、有中人属無為云々、今夜又有物忿事、

管領内人夫刈草之處、可買之由山名下部謂之、不壳草

之由夫丸答之、○押買之間、夫丸難波之處打擲之、夫

以三錢

丸拔刀切下部顔了、仍就此此間山名以侍所之謂称闕所、致無窮之沙汰、結句称陣立亂入洛中土藏、押取質物等

云々、仍諸土藏近日結鼠戶、不取質物致用心、此事山稱借用、

名濫吹以外之次第也、自管領度々可止濫吹之由立使之

処、或称不存知、或又○依疲勞歟之由答之、更不及制

被管人等
我内

止之下知也、結句○夫丸刈草可押壳之由及沙汰之条、

只在別儀歟、所詮可寄山名許之由支度之処、今夕之儀

被管人無道之沙汰也、可切首之由山名謝之、仍屬無為

管領
支度

被管人無道之沙汰也、可切首之由山名謝之、仍屬無為

云々、近日無道濫吹只在山名也、

(同年八月) 一日、乙丑、仲秋朔、幸甚、

「今月□□永基卿參会之時、相語云、公家御旗同可

被申出歟之由有其沙汰歟、而於細川讚岐守持常・山名等

者、已給武家御旗進發了、山名并讚岐ヨリモ上ナル

者ノ、只今給御旗テ可進發其仁無之、仍不被□出之

由有其沙汰云々□□

(同年八月) 廿一日、乙酉、天陰、

播州合戦事、淡路守護細川淡路守也、乘船寄塩屋関焼払之、

赤穂郡

墜命被疵兩方在之、相統細川讚岐守・赤松伊豆入道等

自陸同攻寄合戦、共以官軍乗勝之由注進云々、珍重々々、

美作國中朝敵悉退散之由、山名大夫人教書道常勝注進云々、

(後略)

(同年九月)
五日、己亥、天晴、

伝聞、山名右衛門督持豊^(佐)惣領也、攻播州、已打取坂本^(師磨郡)、敵陣木山^(揖保郡)、日來赤松満祐入道父子在之、仍○楯籠城中云々、國人等多

降参云々、先以珍重々々、

十二日、丙申、天晴、

後聞、播州木山城已初責落、赤松父子父満祐大法性^(常弘)具事也、

後聞、無此儀、只自放火^(皆切腹)、

於赤松播磨守^(彦四郎)滿政陣自殺了、弟左馬助者於木山城自殺、

出云々、^(彦次郎首同不見)降参云々、

投身於火中了、弟伊与守義雅者被擒云々、落此城事、

山名惣領自身攻入之間、已如此、向父子向播磨守陣切

腹之間、^(満祐法師首自火中求出之)賊首播磨守^(彦四郎)奪取寺

感得之、^(彦四郎)無此儀也、^(彦四郎)山名伯耆守護実名可尋^(教之)、彼

職歟云々、所説篇々、未知一定、先以珍重々々、此事

昨日事云々、

十三日、丁未、天晴、

詣三宝院尋申播州事、僧正房有出座、木山城自山名手

發向攻落之、赤松切腹由有注進云々、巨細者未聞、定

近日又有注進歟云々、早速之靜謐、天下大慶只在此事、

仏神之冥助不能左右者也、

十八日、壬子、天晴、

赤松大膳大夫満祐入道法名性具首京着^(昨日事也)、山名某^(伯耆)守護自火中感得云

々、昨日執事細川右京大夫持之朝臣先令実檢云々、今^(御童体)日室町殿御出伊勢守貞国入道宿所^(御路之間有警固云々)、令実檢

給、即御帰第、

九日、壬申、天晴、

伝聞、山名右衛門佐持豊在播州、濫吹狼戾以外也、減

赤松称我功、望申守護職、不及裁許時分也、奪取寺

社・本所・武家人々所領・年貢等、猛惡無度云々、彼

若補守護者、一國可滅亡歟云々、莫言々々、

翌 蔭涼軒日録 長禄二年十一月~寛正三年四月 統史料大成

廿日(長禄二年十一月)
(中略)赤松次郎法師、昨日懸于御目、奉懸于御

目之事、依管領被白而御礼白之、(中略)宝林寺并法
雲寺不知行之事、守護難渋之由白之、(後略)

(細川勝元)
(山名持豐)

廿二日 播州宝林寺并法雲寺領、還附守護難渋可催促
之事、大雲庵灯油田之事、而催促之事、命于寺奉行
事(貞元)、飯尾左衛門大夫、(後略)

(貞保三年六月)
(中略)於御所之間伺赤松次郎法師知行、備前

国新田庄(三石・藤野・吉永保)
(教之)三ヶ保之事、与山名相模守方有相論、其謂
何哉、三ヶ保之事、新田庄之内乎外乎之論也、爰三
保在新田之内云々、以証狀奉懸御目也、(後略)

廿四日 (中略) 赤松次郎法師、新田之事、同備(山名教之)前守護
御奉書之由被仰出、赤松次郎法師方同前被仰也、
違乱之事伺之、(後略)

(後略)

晦日 (中略) 赤松次郎法師与山名相模守論新田三ヶ保
之事、若無相模方之支証、則可被付于次郎法師方之
由被仰出之旨、於殿中、布施下野守語之、(後略)

(貞基)
(教之)

廿一日 (中略) 赤松次郎法師備前新田三箇保之事、山
名相模守押妨、(後略)

(同年十月)廿八日 (中略) 但播州宝林寺領還附之御礼、就本院被

白御礼也、山名金吾以為檀那之故、被參御相伴也、

(持豐)

(貞保四年六月)
(中略)

廿八日 播州宝林寺領役夫工米事、備前守護順
行難渋之由、披露之、其難渋之謂如何、飯尾左衛門大
夫并四郎右衛門尉可相尋之由仰出、赤松次郎法師、

知行三箇保事亦同前、(後略)

(同年七月)十九日 (中略) 播州宝林寺領備前新田庄内吉永保役夫

工米京濟之御奉書雖被成下、依守護難渋、自寺家以
状嘆申之故、遵行難渋之上者、重可被成京濟之御之
御奉書之由被仰出、赤松次郎法師方同前被仰也、

(貞正三年四月)
(中略)就赤松次郎法師知行新田三ヶ保、山名相
模守違乱不止、竊披露、以前御成敗之趣披露之、若

有所申則可有御糺明之由依申之、即御領会也、(後略)

○赤松次郎法師丸 (政則) が家督を認められて赤松氏が再
興され、所領として備前国和氣郡新田莊三ヶ保 (三石・
藤野・吉永保) を安堵されたが、山名氏は赤松氏再興を
不快として執拗にこれに抵抗する。しかし将軍足利義政

二 中世の出石

は赤松氏再興に好意的で、蔭涼軒主季瓊真榮（赤松氏庶流上月氏の出身）も赤松氏を積極的に援助し、山名氏は將軍家と対立せざるを得なくなってくる。

翌 東寺執行日記 文明五年三月

（文明五年）
三月十八日曉、山名三位入道殿死去、十申歳、七同廿三

日茶火ト人々申也、七ヶ日、北山禪院、
已後也、（北山頭持寺ト申、死去等カ）

廿三日、山名入道殿宗全、茶火、
十八日也、十六日ニ大去
事ニテ、十八日治定歟、

四月廿八日、山名入道殿宗全、四十九日満申、

翌五 親長卿記 文明五年三月十八日・文明十六年正月廿七日

（文明五年）
三月十八日、雷鳴雨降、今日敵陣大將山名右衛門督入道宗全死去、七十歳
天下亂逆、件禪門与管領勝元張行

歎、
（文明十六年正月廿七日）晴、
（政豐）入夜雨下、伝聞、赤松兵部少輔没落云々、

（政則）
山名発向、又被官人不相從之故云々、

翌六 實隆公記 文明十五年九月廿七日～明応八年正月廿三日

（文明十五年九月廿七日丁巳）
天顏快晴、（中略）但馬一宮鳥居、去月横木落云々、
件日、山名播州出陣門出之翌日也云々、
（同年十一月十四日癸卯）
霽、（中略）（政豐）聞、赤松分國三ヶ国山名打入云
（播磨・備前・美作）
（明応八年正月廿三日未）
於東隣待月、依有宿願也、象戲移刻了、
（中略及）
（明応八年正月廿四日癸卯）
後聞、今日山名右衛門吾逝去云々、自去八日違（政豐）、五十九歳云々、不便々々、

翌七 蔭涼軒日錄 文明十七年四月～長享二年九月

（文明十七年）
四月朔辛巳（中略）自播之城有注進由、丹公來告之曰、
去月廿八日申刻蔭木城攻落之、垣屋越前守・同平右衛門尉、其外垣屋一党悉討取之、田公肥後守北遁往坂本、凡所取之頸三百五十余云々、

二日（中略）午時自播之滝野城藤左状到来、去月廿七

日、八日之合戦之時宜、与前所聞無差謬也、

(文明十八年正月)
十一日（中略）此日從播之陣、有注進、去六日於英賀

有合戦、(追)桓屋越中守、同息孫右衛門討取之、其外數

十人討之、

(同年六月)
廿四日 天快晴、（中略）今日廿四日普広院殿御仏事錢、

(足利義教)

(政豐義道)
山名殿千匹、(義道)一色殿五百匹、(義道)武田殿五百匹進上、寺

家請取到来、赤松方進上于今無之故、以實告上原対

(佑貞)馬守方、対馬乃來曰、先自寺家被出請取、堅調請文

可進、此旨被達寺家為幸、乃遣丹首座於普光院、賀

首座并侍真初藏主方江白之、雖無其例、愚所白難默

可出請取云々、上原方調請文遣之、自寺家先千匹之

請取調之、出之上原、(鶴尾清房)歷加賀守一見、（中略）山名殿・

武田殿・一色殿・赤松殿御仏事料寺納請文四通、

廿六日（中略）普広院年忌錢請取六通供 台覽、五貫

文且納、一色殿拾貫文、山名殿五貫文且納、同治部

少輔殿拾貫文、赤松殿拾貫文、土岐殿五貫文且納、

武田殿当年者院奉行、飯尾加賀守嚴重依督、諸家如

此進納有之、普広院御仏事之化儀、亦增前年也、

(文明十九年正月)
廿一日 天快晴、（中略）秋庭癡話愚云、先是山名殿雜掌

垣屋越中守・村上左京亮兩人、日々夜々来于我等方、

播州合力之事并公儀取合事、可白伊勢之事、此兩条

切々督之、雖然安富、某、今一人有之、三人令談合、

々力之事并公儀取合之事等、太不可然由、堅入右京兆

耳置之故、不可叶之由返事有之、彼雜掌云、然者兩

人往伊勢守宅可訴訟、被相副使者、兩人自分可達

上聞之由、被加一言者為幸、於爰京兆不獲止、命安

富、某兩人、差遣伊勢守宅、兩人先以内者告伊勢守、

然間伊勢守成御覺悟、先召兩人有內談、其間者彼雜

掌兩人者被置門外、伊勢守出盃勸兩人、酒宴半召彼

雜掌二人、終不及彼訴訟之事、為大酒宴各醉帰、安

富、某相談、騎下地之馬、相並轡於途中相談、以白

勢州、如此於赤松致忠節也、于今誰亦不可知之事也、

又庄四郎次郎某甥也、某傍輩有云山田、与山名方相

近、又御母被相憑渠、々又与庄相近、以故彼山田陽

為京兆使下庄宅、說得四郎次郎云、就播州合力之事、
京兆引寄我組、彼云、命庄伊豆守進發播州、可合力
山名之由敵有命云々、庄成寔會命四郎次郎進發于播
州、某与四郎次郎一所之故、彼身依之者來告寔、某
將謂京兆者、未可被見知彼山田頗、況直引寄其組、
彼密談之事不足信用之、於爰某相尋子細於京兆、則
如某推量、京兆夢亦不知事也、山田云者誰歟云々、
以故自某方堅白付于四郎次郎令開陣也、四郎次郎伯
父僧青原寺云者、某久知音也、依之于今与某白通也
云々、愚云、以此旨、必可白聞于兵部公云々、棕子
在座具聞之、

(文明十九年三月)

(天隱童沢)

十三日 不參、天快晴、(中略) 晚來大昌和尚并愛庭学

(政豐)

侍史勸一盃、時自播之陳有捷報、蓋山名金吾坂本

(前宗)

之城、不知其所向、赤松兵、浦上美作守為首自坂本

東口切入、自西口小倉小四郎攻入、坂本封疆大略燒

失、討取數輩、生擒亦數輩有之云々、長津尼次郎兵

衛尉・浦上与三郎討死云々、

十六日 天快晴、(中略) 自吉阿方祐乘坊来云、播之陳
山名、赤松各歸本陳云々、蓋自池田方之注進、
十七日 不參、天快晴、(中略) 晚来自播之陳注進到来、
英賀西、同筈見山兩所、去十一日責落之、馬田山城
守、同三郎討之、頭寔見云々、山名彈正殿但馬可有
入國、先十三日著陳播之山下云々、

(最享元年九月)

四日 不參、天快晴、(中略) 次往大藏卿局、相公御動
(政則)
座之事、談赤松公上洛之事、局語云、山名殿上洛之
事、無□御下知之故、御局御内書之事頻々被白之、
不見得默止、見調御内書、某寵臣近前相公(足利義政)、則相公
以此御内書告寵臣、々々云、今度江州御進發之事、
見命石木、被成御奉書、御奉書持下者、借宿則(六角高賴)
自太守

(前宗)

方燒失宿所、是乃御對治之濫觴也、況山名事破御
判、播州強入之事、其緩急与破奉書者、其咎輕重如
何、相公聽之含糊、以列花其内書、丙之、赤松公面
目無其比類者也、山名為御敵之段、無異論云々、

(同年十月)

廿三日 (中略) 晚來山名又次郎殿參陳、馬上十三、步

卒三四百人云々、

(貞享二年四月)
九日 不參、天快晴、(中略)自浦上^(則志)作州状到来、自播

秀上司輿昇上洛、去七日於坂本合戰有之、上月又五郎負手由、自秀上司状有之、来十日一定之大責可在云々、

十七日 不參、天洒小雨、斎了、自播安阿弥父來、去

九日合戰之儀話之、依藤左状有安阿弥討死事、見之

墮涙、(赤松方)當方得勝利、速水十郎、三吉又三郎、三宅大

郎左衛門尉頸取之、

(同年五月)二日 天快晴、(中略)兆藏主帰洛、赤松^(政則)返章持之、来

去月八日・九日坂本合戰談之、

(貞享二年七月)廿一日 不參、天晴、(中略)山名右^(政豐)金吾公、去十八日

亥剋出奔坂本、備後衆悉没落之由、自堀出^(秀世)雲守方告

之、(中略)浦上三郎四郎入備前福岡之代云々、

(同年八月)五日 不參、天快晴、斎前於播州討取敵方頸注文、自

(赤松政則)屋形到来、去月十九日、於大河内討捕頸十、同廿日、

於広瀬城討捕分五、同廿日、於但州丸山麓討捕分二、

以上十七、(中略)佐野孫左衛門尉父子來一宿、談山名殿出奔之事、

十七日 不參、天晴、(中略)去十八日山名殿播之坂本沒落之時、喜侍者在坂本、其時体委曲話之云々、金^(山名政豐)吾者在九日、田公父子・其寄子・馬廻衆十人員、付金吾、國人頭廿六人、其外諸侍悉同心背田公、又次郎殿亦与田公不好也、金吾一人与田公也、備後衆悉背金吾云々、

(同年九月)二日 天快晴、(中略)丹公曰、乃刻自丹之夜久僧來話、

但馬之事一國悉依垣屋、田公息新左衛門、構城於木崎居、不足一蹴、金吾・田公肥後守一所居住、其外

馬回衆十員許隨逐金吾、其中宇津・下津屋兩人總衆

惡之、垣屋衆凡三千員許有之、總衆者以又次郎殿欲

為主、垣屋孫四郎未定、其主人不識其意云々、金吾・

田公所居阻木崎者十八町許、正法寺云寺也、木崎云

八永泰院領、乱來、田公押領也、垣屋所陳与阿左古

(朝采)郡相隣、室野ト云、美酒在所也、朝來郡衆者、以又

次郎殿欲為主也、垣屋未与之、

○山名政豊が旧領回復を狙つて播磨に侵入し、敗退するまでの数年間の記事を摘記してある。

五八 後法興院記 文明十六年一月～長享二年七月

(文明十六年二月)

一日(己未)晴陰、(中略)伝聞、播州之儀以外錯乱云々、山名^(政豊)入国砌、赤松被官人浦上以下悉背兵部少輔間、遁

(長享二年七月)
世云々、依是山名方弥得利云々、

廿四日(丙戌)此間天氣同前、風又吹、伝聞、播州之儀山名没落云々、

五九 多聞院日記 文明十七年四月十日条

(文明十七年四月)

十日赤松殿少輔、備州肩背郷内御油田都染尾張分之事、始而被寄附興福寺畢、(中略)今度一所寄附之由

來者、播州・備州以下赤松本来知行之分国之事ヲ、

先年普光院ヲ、^(足利義教)於赤松屋形奉誅之後、公方依為御敵、

為山名金吾^(持豊)入道令對治赤松、自其以來、依上意軍忠、

而赤松分国山名方令知行、然處又近來赤松之家依御免、分国如本知行処、一段以軍忠被配行上者、不可去渡之由申、山名自身去年及合戦令入國、山名令知行了、然ニ旧冬又赤松令下向、致入國之企、連々及合戦之間、依少勢初ハ赤松打負、大略無正体、然而兵部少輔依為無双之勇者、当年閏三月廿七・八日、合戦令得勝利、赤松方大慶此事也、是併春日大明神御冥助之事ヲ、合戦之前三祈念之間、依冥力達本意上者、初而令寄附一村、剩旧領當寺社領可令還附云々、殊合戦之前祈念之後、神鹿馳入敵之城中、其以来山名方城中無正体落畢、垣屋名字悉終了、依之別而被寄附之條、當社大明神之御神德也、

惣今度赤松方勢六千、山名三万云々、然而廿七日・八日兩日合戦者、垣屋之陳所森岡之城責落之時ハ、山名殿自身ハ被陳取坂本之間、遙ニ遠シ、垣屋之勢ノ分也、大都人勢、兩陳同七・八日之合戦ニハ同辺歟、

四〇 興福寺年代記

文明十七年閏三月廿七日条
『大日本史料』第八編之一七

十七閏三月廿七日、山名、赤松^(播)幡州合戰是始也、

四一 山科家礼記

長享二年七月二十三日条

『史料纂集』

廿三日 晴、曇、乙

一去十八日山名殿播州取ノカレ候也、

四二 山名巨川居士寿像

東海瑞華集一 五山文学新集第一卷

山名^(時熙)
巨川居士寿像

大同現住南洲座元、求陋贊以
鎮山門、^(參)

長於撥亂者短於治民、悟心為先者遊芸為後、夫並舉以
並能、抑絕無而僅有、若我鳳軒公、豈其人乎、參幕謀
將置之韓張耿鄧之科耶、則三府嚴明之鑑、偷刻屏蹤、
數州寬大之條、饑寡得廩、夙薰般若種、密剔^(月庵宗光)
大祖機、^(表体)雖号諸方參遍、不奈驀面一揮、亦將班之^(龍德)
龐翁之際

四三 司馬溫公画像

東海瑞華集二 五山文学新集第二卷

司馬溫公
画像

耶、則竺偈和歌肆口迅筆、眷容寂寥多々益出、吁有余
于彼有欠于茲、儻擧其二才占其一、足得而言之哉、譬
諸水也、江河淮濟名稱無究、匯為大海万派混同、其大
同乎、觀夫凜々儀度、宜安大同室中、雖無紀功褒德之
語、摸索可識為鳳軒公、我願春秋之算、石護其固、福
祿之資、山加其崇、永々護持大法、豈啻鎮此禪宮、

蚤立慶曆治朝、名喧夷狄、晚莅元祐初政、立活兆民、
皆天水勃興之運、寔汴都極盛之辰、一馬二童系國輕重、
深衣蟬冕忘身屈伸、以故坡老有言、雖與衆榮中有獨榮、
潘公亦称、要非今人求之古人、兩賢之贊揚如此、千歲
之追慕何因、然而如春在花月在水、邈騎箕尾或降神、
溫国司馬文正公画像、乃巨川大居士所持、伏暑中困
於微恙、對此幅仮寐、忽得異夢、起坐脫然、不知病
之去來、寶秘益慎、命予贊詞、謙拒弗得、謹書、奉

呈、

四四 元日立春詩後叙

応永二十六年
東海瓊華集三 五山文学新集第二卷

元日立春詩後叙

以彼方觀之、詩者士大夫之業也、姫且吉甫所製、見于詩、列国会盟、賦以示情、亦載于伝、臻於後代、以全集行者、不可得而縷挙焉、吾禪家者徒、直趨性源、文字章句之學、若將浼焉、况從事一吟一詠之際乎、然唐宋以來、能者間出、以彼較此、九牛一毛而已、本朝和歌之道、盛行于世、士大夫言詩者、幾乎絕矣、獨吾徒、

吾伊上口、則研辭造句、惟以為務、世亦以詩學專門命焉、風俗異習如斯、源金吾巨川大居士、累葉武門、現拋大藩、天資嗜詩、性不学而能之、凡佳辰令節、花晨月夕、以至燕會歡娛、閑暇亡聊、不平靡一不寓於斯者、居家人皆棄之、間振千載既絕之緒、豈淺為大夫之所能也哉、(応永二十六年)己亥元日春立兩篇、數蒙投寄、蓋過聽、以予為同嗜乎、詩寔吾徒末事也、然禪誦有暇、陶冶性情、排

遣塵習、或似可尚已、比年、此風陵夷、以攻文辭為忌、

窺其外、不謬不立文字之号、察其内、華衣玉饌、遊譚無根耳、何其不韻之甚、然則巨川之作也、非唯有補於世教、亦足以警吾徒不韻之弊、非絕代傑特之才、孰能予茲登耳順、頭毛白者、居三之二、百念灰冷、杜門待盡、斯編之成、不能無感触、便叙其末、以記歲月云、

四五 和金吾韻

東海瓊華集 五山文学新集第二卷

和金吾韻(山名時應)三首

相國祠前明月秋、臣民(中イ)内外不堪憂、賤蹤東伴金吾語、聞說當時禁夜遊、

百出光陰易感秋、仙山俗国有何憂、(愁イ)不帰兜率天中去、
応向蓬萊(月下)海上遊、

年々明月寿千秋、豈料人間有此憂、(計イ)青女素娥應白髮、
樽前曾是侍歡遊、(音イ)和金吾源公韻

穹樓拱北月叔東、夜直尋常不出宮、(松江)水竹冷々僧院宿、
禁鐘入夢五更風、(升イ)
冷蘿粲然臨路隅、似欺奔走日區々、梅花却被行人唉、
不帶離愁何事癯、

○「東海瑞花集（絶句）」にみえる詩句を（イ）で示し
た。時懲に関するもの一部を示したとどまる。

四六 叙月菴禪師語録後

応永十六年正月十六日

東海瑞華集三 五山文学新集第二卷

叙月菴禪師語録後

黒川月菴(宗光)大禪師、戢化既廿余載、而縉白欽仰、兒卒誦
知、猶如一日、道德之感人也、深若此、然而口舌所伝、
易於訛舛、取信後世、弗可無之紀述、茂林樹公、久侍
左右、乃詔石之(雲門文偃)香林也、故撰行実一通、亡慮數百言、
頗為詳悉、金吾(山名時懲)公巨川居士、於師門也、亦兜率之(徒悅)無尽
也、唯恐師道不顯着、煥赫於永々、便走幣附舶、遣于

皆謙拒不敢為、使的三四、往返而不果、於是、戊子冬、
茂林亦逝矣、金吾公、慮狀散逸、刻板以壽其伝焉、吁、
吾朝近古諸老、如天龍國師・建長古先禪師、皆得明之
宋學士景濂氏銘文、其鴻筆偉辭、足以摹述高明盛大之
蹟、無慙德無乏辭、為得其所、則吾師之塔、又有所俟
乎、儻有景濂氏者出焉、舍是而將何所徵、刻而伝之、
不亦宜哉、

四七 屏風贊

補庵京華前集 五山文学新集第一卷

○「但州大明寺開山月庵和尚語録」二冊は大同寺に現存
する。丙戌八月、すなわち応永十三年八月に門人茂林
興樹が編纂したが、応永十五年冬、茂林が死んで山名
時懲は惟肖得嚴にその跋文を請い開板したので、末
尾に「応永十六年竜集己丑正月十六日小比丘得嚴謹
志」と刊記がある。

架上豪鷹如此稀、風吹殺氣透人衣、獵旗未動沙岡草、
明國、求銘諸塔、凡禪苑教序、称能文者、數謁數請、

屏風贊以下三首、垣屋越前守請

啄断金條勢欲飛、架上鷹

狡兔似無三窟謀、蒼鷹下擊氣橫秋、淒風浙瀝敵霜曉、
血灑平蕪月亦愁、鷹搏兔

荷花深處晚風香、雲寺若溪天一方、驚起雙鳧相逐去、
誤疑翠蓋擁紅粧、荷花双鳧

癸六 太田垣作州壽像贊

禿尾長柄昂下 五山文學新集第四卷

孟軻曰、所謂故國者、非謂有喬木之謂也、有世臣之謂

也、夫世臣者、不翅世其祿爾、其功烈已著於時、德望

已信於人、譬若喬木封殖、愛養而自挾把至合抱者、非

一日之故也、太田垣作州、姓日下氏、乃山名源公幕下、

世其祿之人也、蚤歲事大明寺(山名時應)巨川公、撫愛甚矣、中年

遠碧院(山名持豐)最高公、任用久矣、今之(右山名政豐)金吾公、恩遇無出其

右、三世之間、治亂一節、出言必忠、竟無失策、以故

金吾公(傳)賢息俊(山名)豐公、往司備之後州時、齡猶幼、命以

大傅、隨行翊之、功烈德望、弥着彌信、一日寄其壽像、

就予需贊、々曰、

正其心修其身、虛懷藹然和氣挾春、此天地之仁也、研

其精覃其思、霜鬚凜乎威風弘地、此天地之義也、歷仕
其主者既三世、如丙吉(知)大牀、如山濤有密啓、此天地

之禮也、知人生之如寄、修般舟而不棄所要、左拍肩於

円通、右挹袂於勢至、此天地之智也、親佩仏心宗印、

弗墜(宗西)香林后胤、金城湯池、壁立万仞、此天地之信也、

夫是之謂古之遺直今之好俅、名者守美作州、實者治備

後州、字曰德叟、謹宗取者也、

癸九 太田垣作州大守德叟禪門肖像

默雲稿(異本) 五山文學新集第五卷

太田垣作州大守德叟禪門肖像傍有三尊來迎之像、

彌陀補處觀音(羅蓮)々々補處勢至、公与之把手共行、金粟後

身維摩々々後身老龐、公与之並肩以出、銅征徹天雨花

穆々、白髮吹雪清風颯々、不謂濁世衆生、有此在家菩

薩、作巨川舟楫、則輔英主於五朝、為大國藩垣、則振

威名於万卒、礼蓮社之六時、則遠公豈非吾師、慕竹林

△七賢、則嗣宗幸有佳姪、今年已^(衍カ)雖同端明六十六、暮齡必超方朔七百七、

右、太田垣作州前司法諱宗収、以德叟為雅号也、壯歲侍鳳軒^(山名時應)巨川源公幕下、始終如一、今受顧命、輔幻主、以鎮備之後州、可謂喬木世臣也、賢姪光久公、

命絵事求拙贊、蓋平日公務之外、衣布褐敲銅鉦、以唱安養教主之名、以故國様如斯云、

○山名家臣は五山禪僧との接触が比較的に少ない。そのなかでは、太田垣美作守と次の土屋越中守は異色ともいえる。

四〇 土屋越中前司豊春公寿容贊

默雲稿（異本） 五山文学新集第五卷

命於京之内野、在今子孫誇五馬貴、得官於越之中州、鬚髯如青松帶雪、面目似蒼隼橫秋、身在源家氏是平家、衆色敝虛空々々容万象、人称垣屋自号土屋、四河入大海々々^(天)元異流、智略可以當八面、明輩為之避一頭、張弓掛扶桑、宋玉大言何讓、攬轡清天下、范滂宿志無為、王事无塙聞鐘晨起、公余多暇秉燭夜遊、所恨不見大明翁、黃梁昨夢吾生何晚、只喜常陪遠碧老、青雲後塵恩大難酬、加之伝南浦宗不說而說、矧亦唱西方仏無修以修、室无維摩法喜妻、行李不異毳衲、家有普賢長男子、奕葉能紹箕裘、今年已丁未会稽五十富貴之時、行看寿考无窮、一門全盛、明哲保身、自在自由者也、

四一 八木遠秀絕筆歌後序

文明九年初夏
禿尾長柄壺下 五山文学新集第四卷

齊桓公任夷吾九合諸侯之兵、威振五霸臣而不臣之喚作仲父、蜀先生^(劉備)起諸葛二上出師之表、功蓋三分相之大相

者謚曰武侯、風雲際遇極于茲而已、古今君臣有如斯者不、土屋越中前司豊春公是也、維昔祖父爭万騎先、隕

順風而呼、則声不加疾而聞者近、登丘而招、則臂不加長而見者遠、蓋事必有訖以成、斯理之固也、八木庫部

員外郎遠秀、又名宗蔭、字榮中、廻但之前守宗頬寧馨、
 而前右金吾遠碧院公(山名持豐)幕下之傑也、忠而孝、武而文、可
 謂修齊治國平之才、是以君父之所撫字、蔑有駢馳角進
 者矣、文明元年六月晦日、齡二十七而卒、其將終、留
 和歌者一章、平素修般舟三昧、而要籍名於紫雲之上、
 其志也、見于詞、昔在原中將、六月晦日、有歌曰、行
 蛾兮可往雲之上、則秋風吹兮告鴈來、遠秀此日而逝、
 資以用之、人皆感而所哀也、宗頬不勝痛慟、述挽歌二
 章、而与遠秀所留者合三章、貼(以)一軸、金吾公、披而
 見以、追悼有余、攬泪以書弥陀六字於其上、同其志也、
 凡有忠而賞加、有孝而愛篤者、人之君父之常情也、及
 其身既沒則賞之與愛、何以為最、夫西方淨刹者、界外
 也、雖過十萬億刹、一聲之下、去此不遠、金吾公所書
 六字、方便之風也、順之而呼、仏兮徳、々則引、々則
 接、以致染邦、然則非弗忘其忠而封之以彼寶土也乎、
 何賞加焉、日本歌詞者唐詩之流也、雖止三十一字、克
 通幽明、而感鬼神、宗頬所述二章、慈仁之丘也、登之

而招、則靈兮還、々則訓、々則導以(入)聖域、亦則非弗
 忘其孝而一言換凡骨也(俗力)乎、何愛過焉、斯蓋自心本妙、
 於是乎露也爾、此死彼生、間不容髮、豈可以其遠近而
 論哉、將謂非此君父則不得此臣子、非此臣子、則無見
 此君父、烏乎、其宜乎、宗頬介人寄軸、需予叙其梗概、
 以貼于後、故次之如右、第所恨不与郎寵金石其壽焉耳、
 文明九年初夏、

三 遠碧院殿十三年忌香語

雪樵独唱集五 五山文学新集第五卷

遠碧院殿十三年忌香語

(山名持豐)
 孝乎惟孝々心純、一十三年如隔晨、舉香、試看日邊連
 理杏、最高枝上永留春、重拏香、喚之作四照蒼蘭、則
 盖覆笏室之容五百毘耶隸、又拏香、喚之作六銖栴檀、
 則掃空藕殼之竄三千阿修倫、風從花裡過來香、憶隨遠
 師而結黑白社、雲在嶺頭閑不徹、須趁空王而分香火因、
 錯、且道、這錯從何處臻、舉香、重聞兜蘆娑縷陳、

閻婆世界南瞻部洲扶桑山城州京居大功德主政豐、頃
者就播之旧国藏陣、事々既行、而其民寄心矣、爰文
明十又七年季春十又九日、乃以皇祖遠碧院殿前右金
吾最高大禪定門一十三白之辰、預於万勝精舍、修諸
般之法、當其散筵、拜屈南禪堂頭老師大和尚、陞座
說法、兼命常在野衲景菴^(釋波)、焚這香、凡所修之白善、
束付陞座普說、洎唱首回向、所刻之尊像、是今日冥
導大日如來、而昔吾國所權輿也、姑舉其一二、始清
濁未判之先、伊諾辨^(冉)、伊諾册尊、降天瓊矛、攬海者
三、其鋒滴散如露、即印大日二字、然後潮凝國開、
而陰陽資始、遂生日種子、因名為大日本、其土也形
似金剛杵、故配于五智五仏、而內開五畿、外列五岳、
東有八州、則擬之八相、西有九州、則準之九品、抑
播之為國、亦表弥陀之十六觀相、而分為十六郡、夫
弥陀者、華曰無量壽、大日者、梵曰毘盧遮那、其名
雖異、其體惟同、合而称之、則是即吾八幡大菩薩也、
尊靈、平日知弥陀為斯神、特架一字、施安養淨刹於

繪事、因以七重欄楯、裝以七重羅網、朝而唱其名、
夕而誦其名、功課不虛、而俄得播州於馬上、文明初、
君臣道亂、天下騷然、々當此時、暫失之柄焉、厥嗣
不早図、而噬臍者久矣、^(文明十五年)發卯冬、重介于馬、被堅執
銳、一發而輒得其地、吁、尊靈、未瞑而覆蔭孝子^(孝)
孫者乎、是復弥陀悲願之所致也、可尚矣、共惟、

某甲、意氣蓋代、儀標離塵、夐疏清和天潢、派又生支
々又生涯、的伝新田軍義、人能弘道々能弘人、寔非梧
不栖鳳、抑避草必祥麟、左杖黃鉞右秉白旄、名超千古、
北徑紫淵南更丹水、沵及八垠、每詠昏月之浮香而雖思
處士、誰瞻故国有喬木而不称世臣、蔣琬非百里才、其
德合以安社稷、項籍學万人敵、其威殆乎動搢紳、願言
蚤歲誇雀躍、何知晚途觸龍鱗、桃李不言朝露借恩、此
郎當鰥于泉下、花柳無私江山如待、厥孫重出於城闕、
僉曰有後者同不死、豈非惟岳所降之神、三人行則有我
師、遺愛未尽、一戰霸則為文教、旧命復新、將利吾國、
宜施其仁、子駿稱青齊福星、久在東土而救弊、德秀為

湘潭活仏、果向西方而致身、況伝衣具大機大用、然提劍驗全主全賓、滄海變兮濁世布烏鉢、陰霾駁兮殘夜掛紅輪、佗土亦莊嚴、此土亦莊嚴、塵々無碍、妄起即円覺生起即円覺、処々全真、拋香、忽變陣雲成瑞靄、拍掌、凱歌一曲去朝宸、

四三 山名家大追物記

続群書類從卷第六七三（第二四輯上）

篠葉集

（山名時義）故円通寺殿犬追物に好給ひ候間、（山名時應）大明寺殿も殊に此事

功者に候ひし、（山名氏道）宗鑑寺殿、内野の御事候ての後、（寺脫カ）円通

殿の御一跡は、大明寺殿に候故、但州御入部（山名）持豊に

至り、父祖の恩厚く開け、八ヶ国の守護無相違旨を賜り、此時いかてか家に伝る犬追物の故実を正さらんや

と、京都より名士等を集め、不審の数条尋究、□□□

□伝るものなり、夫狗追物の起源の事、家□□□伝る

事一決ならず、いにしへ禁中にて犬狩と申事侍りて、

所衆雜色なと申官人是を狩立る事ありて、其子細順徳

院の記し給ふ禁秘抄と申物にありとそ、井手某語りき、是を武家にうつして、犬追物ははじめける由なれとも、事似たる似にて、実大に違へり、又の説に、神功皇后三韓御征伐の時、三韓の王は日本の犬なりといふ故事あり、是より事起るといへとも、是以降を乞て伏し從ふものを、射習ふべき様なき事なりとぞ、或故実の武士の申き、又近衛院の御宇久寿年中に、玉藻前といふ女、下野国那須野の狐にて、是を射習ふために、犬追物を始たりなと申説もあれとも、たしかなる記録にはなき事のよし、京家の学才たち申さるゝ旨なり、陰陽道に搜り問へは、其とき安部泰親朝臣ト術の功験ありし事など申せとも、させる証もなきにや、当家伝來の子細は、先祖山名冠者殿遺命に云り、或る宿儒云、犬追物者日本書紀第八ニ見ヘタリ、仲哀天皇熊襲ヲ討玉フニ始ル、熊襲ハ隼人ノ集ル國ニテアレハ、隼人□□□□タケキモ、王化ニ從ヘテ見セシメ玉ウ、御□□□

但仲哀ノ天子ハ不吉ノ御例ナレトモ、其御仇ヲ報ヒ玉
フ世々ノ御捷ナルヘシトソ、昔一条院ノ御宇、於京洛
狗追物アリ、賴光朝臣ノ御一族是ヲ申行ル、是全源家
ヨリ申始ト聞ヘシナリ、上総三浦ノ両介、其子孫モア
リテ、玉藻ノ事正ニ家ニ伝ルトナレハ、所詮批判モ如
何ナルヘシ、当家犬追物故実ノ一巻ハ孫二郎殿の記是
なり、然るに是は道靜公の御時、(山名時茂)宗鑑寺へ御讓候、愚
祖にて候円通寺殿所望候へとも、其ゆるしなく、あま
さ(脱カ)ヘ公方より召候て、一巻は公庭にあり、其うつしは
宗鑑寺所持申さるゝところに、去ル明徳の比ほひ、宗
鑑寺逆意、(山名時熙)故殿公方の御味方申たる故、一家のよしみ
互にむなしく、鉢さきをとき申候訖、公方より家の物
なればとて、彼一巻を故殿にたひて、(賜)予に伝れり、こ
れによりて犬追物の来由をしるし添て、子孫にとゞむ
るものなり、

犬は只我弓にこそあるへけれ、弓は心の外になければ、
此歌子か偶作なり、犬射る故実此外に□□□ぬものな

り、

右之一巻者、(山名持豊)愚父所被筆記也、又号篠葉事者、當時

所用之家紋、有軍功之矩模之旨、弓馬之大慶表示之了、子孫可レ秘、云々、殊去年八月廿二日細川京兆之

馬場一会、公方御成之節、少彌殿々々と伊勢兵庫助に呼懸られ候ニも、愚兄此家伝心中ニ明白ニ候故、イカ

ニ伊勢殿八疋二十二疋ハ合申サヌニヤト申候時、伊勢

守出ラレ、備中ハ十五疋候と高声ニ被申ヲ承捨テ、次

ノ百疋興行ノ時、備中十一疋ニ、此方十三疋、イカニ

伊勢守殿ト申テ退候也、皆々先祖ノ高恩と存知、殊以

弓ハ心ノ外ニナケレハノ一句、庭訓ノ至極、犬追物、牛追物ニハ限ラス、一切武道武芸ノ指南車ト奉存者也、

依加ニ奥書ヲ訖、

文正元年十一月初丑

(山名)
是豊

右篠葉一巻、叔父是豊之手跡也、依御所望進之者也、

六月十日

(山名)
政豊

越中守殿

射大正法

(本文省略)

犬追物之始リノ事

篠葉集ニ云、先祖ノ遺命ニ云、犬追物ハ仲哀天皇御宇、熊襲御退治ヨリ事起ルトナリ、源家ニ申承ル事ハ、一條院御宇、頼光朝臣ノ御一族申行ル、是始ナルヘシト

ソ、今按スルニ、此犬追物仲哀天皇ノ御宇ニ事起り、別ノ儀トシテ、訴申ヘキ事ナリ、必源家ノ將軍ニアラサレハ行ヒカタキ事ト、父祖被申伝訖、一鎌倉將軍家犬追物図別ニ有之故、不載此者也、只當時興行之様子計畫留之者也、

一一手組之事別卷ニ有之故、不載之者也、

止ルナルヘシ、依之鎌倉（鎌夷朝）大臣家御時、始テ武家ニ行ハル、ナリ、平家治世ノ時、犬追物アル事ヲ聞ス、後醍醐天皇ノ御宇、小笠原貞宗奏状ヲ獻シテ、犬追物再行ノ願ヲ立ツ、是亦源家ナレハナリ、近世行ハル、所、畠山・土岐・細川・小笠原・一色・志波・（近）当家ナ

二 中世の出石

(山名)
致豊謹而写之、

○山名氏は武芸の家であつて、とくに大追物の故実に詳しかつた。

かぎやしやうをそへ申候へく候、あまりニヽなげき
かきや申候間、なをヽことをつくし候て、ほん所の
かやうニ候間、身としてしやうもなきやうニれうけん
申候、御心へ候へく候、ちとおそく候ハくるしからす

四四 小田井社神主忠重請文 永享六年三月廿九日

広島大学蔵 猪熊文書(+) 青蓮院文書(○号)

〔端裏書〕
「小田井請文」

請申(城崎郡)小田井社領家御年貢事、右御領請切申上者、京着

式拾陸貫文、不謂損否可運上申候、但此内拾貫文者七

月に、残分者十月中可皆済申候、若無沙汰仕候者、所

持分財物神主職以下永可被召候、仍為後日請状如件、

永享六年三月廿九日 但馬国きのさきのこほり

神主忠重 (花押)

六月廿九日 (山名)
宗全 (花押)

御返事

〔礼紙切封ウワ書〕

宗全

御返事

〔礼紙切封ウワ書〕

宗全

○但馬の中世文書については『日高町史資料編』に詳しい。
そこには「進美寺文書」・「大岡寺文書」・「垣谷文書」・

「国分寺文書」・「日光院文書」などのほか、「仁和寺文書」・
「徳禪寺文書」・「高山寺文書」・「法恩寺年譜」・「曇華院

文書」・「南禪寺文書」・「伊達文書」・「河本文書」・「古志
文書」・「田結庄文書」・「土肥文書」・「吉川文書」・「今井

宗久自筆書札留」その他の文書が博搜されているので、
それらを参照していただきたい。

四五 山名宗全持豊自筆書状 六月廿九日

広島大学蔵 猪熊文書(+) 武家文書其一ノ一二号

せいしんよりのしやう心へ申候、いま一ない(内) 二(外)て